

世界の著名な特許にみる ————— 第30回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

藤岡市助 その4 工部大学校卒の電気工学の先駆者たち

志田林三郎（電気学会創立）

中野初子（国産初の大容量発電機）・浅野応輔（無線工学）

日本人による工学教育のはじまり

東京帝国大学創立、工学会（日本最初の工学系学術団体）創立、理学協会創立



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

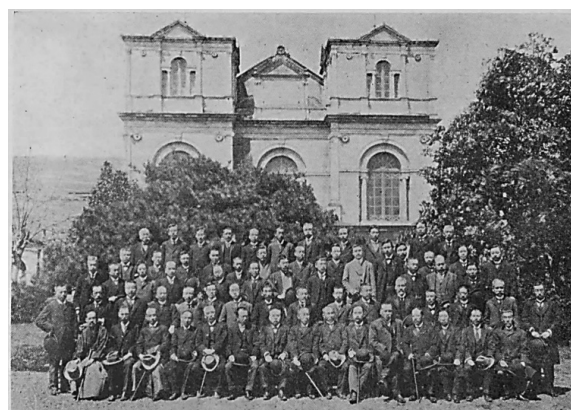
大樹 七海

はじめに

(1) 近代工業を担うエンジニアの誕生



工部大学校卒業生 明治14年5月撮影
前列右5番目藤岡市助25歳 出典：工学博士藤岡市助伝、藤岡市助君伝記編纂会編、昭和8年



工部大学校出身者の集い 撮影年不詳
2列目左から7人目に藤岡市助
出典：工学博士藤岡市助伝、藤岡市助君伝記編纂会編、昭和8年

前回のおさらい 工部大学校卒業

わが国の電気産業史を辿ることは、藤岡市助がその一生を捧げて、わが国の電気産業創出のための、あらゆる下地を整備していった、その人生そのものを辿ることに重なっていきます。

前回、17歳の藤岡市助青年が、岩国藩主の吉川経健の命にて、毛利家を主藩とする長州藩の支藩、岩国藩から上京し工学を志しました。

藤岡市助が入学した工部寮（のちの工部大学校）は、工部省を設立した伊藤博文と山尾庸三らの肝煎りで新設された、わが国の近代工学を牽引していくエリート養成機関でした。長州ファイブとよばれる伊藤博文と山尾庸三が、文久3年（1863年）、日本人初の英国留学生として密航した際に目にした、わが国と欧米との科学技術力の差に、非常なる危機感を覚えてのことでした。明治維新の傑物たちの先見の明が、藤岡市助らに受け継がれていきます。

明治14年（1881年）、第一等の成績を修めて工学士を取得し、工部大学校を卒業した藤岡市助は24歳になっていました。藤岡市助は工部大学校の3期生でエアトン教授の薫陶を受けました。エアトン教授は、山尾庸三が工部大学校設立構想のために、日本での教授陣の紹介を求めて相談した、英国グラスコーのラスキン教授や大物理学者ケルビン卿の弟子に連なる一流のエンジニアでした。実学・実践を重んじる彼らのエンジニアリング精神が、藤岡市助らに受け継がれていきます。藤岡市助らは科学の理論を学んだ上で、さらに全国各地で実地研修も積み、日本の工業技術の発展に貢献するという志に燃えていました。

このようにして、いよいよ日本は、近代的科学教育に基づく工業化を目指す段階に入っていきます。「発明事業列伝」＜田中久重ことギエモン編＞の時代では、「職人」が、その勘と、私塾の蘭学塾等から得た知識にて、

工芸から工業に入っていく時代でしたが、＜藤岡市助編＞では、近代的科学教育を先に受けた上で、「エンジニア」として、工業を起こしていく段階へと時代がシフトしていきます。

(2) 工部大学校卒の電気工学の先駆者たち 志田林三郎、中野初子、浅野応輔

今回は、明治初期の理工系教育機関の創設と、新設された工部寮（のちの工部大学校）の入学から卒業までの藤岡市助の足取りを取り上げました。

今号では、工部大学校で藤岡市助と共に学び、協力して電気工学の黎明期を支えていく、志田林三郎、中野初子、浅野応輔を取り上げます。

志田林三郎は、藤岡市助の先輩で工部大学校1期生のうち唯一の電信科の生徒です。日本初の工学博士となり、電気学会を創設者となります。英国留学中、かの大物理学者ケルビン卿をして、「私の生涯の中で最も優秀な学生」と言わせしめ、帰国後は藤岡市助とともに工部大学校の教授にあたり、電気工学界を率いていきます。

そして3期生同期であり、藤岡市助とともに三羽鳥と呼ばれた中野初子、浅野応輔（3人はともに第一等の成績で卒業）も工部大学校の教職を受け持ち、各々の本分にて電子工学分野を推進していきます。

1. 日本人による工業教育のはじまり 工部大学校助教授へ

明治14年（1881年）5月に工部大学校を卒業した藤岡市助は、ただちに工部七等技手に任命され、引き続き母校の工部大学校に在籍します。そして翌月、工部大学校教授補に命じられ、教わる側から教える側に立ちます。

翌年の明治15年（1882年）、工部大学校では、初代都検（校長、教頭のこと）ヘンリー・ダイアーの任期満了による退任を受けて校制が改正され、工部省直轄となります。職制の